

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32630

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20704

研究課題名（和文）日琉諸語における格という文法カテゴリーの検討

研究課題名（英文）Case as a Grammatical Category in Japanese and Ryukyuan Languages

研究代表者

竹内 史郎（Takeuchi, Shiro）

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：70455947

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日琉諸語における格という文法カテゴリーについて検討した。主な成果は次の四点である。（1）述語と項の関係を決定する手段には、格標示のほか、語順、有生性、世界知識、文脈がある、（2）一つの節につき一つの手段があればよいので、語順、有生性、世界知識、文脈は格標示と等価であり、かつそれぞれが競合する手段である、（3）名詞句は、格という文法カテゴリーをそなえているとは限らない、（4）主要項のコーディングにおいて、格カテゴリーが文法化している度合いが言語ごと、方言ごとに異なる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語学および一般言語学における理論的な考察では、一律に「格」という文法的な手段によって述語と項の関係が定まるとされ、この「暗黙の了解」についてはほとんど顧みられないことがない。この意味で、本研究が提出する格カテゴリーに関する考察は、通言語的研究における理論的考察に大きく貢献することになると思われる。すなわち「格」を、述語と名詞句の関係を表す名詞の形態的特徴とする、通言語的研究の定義に書き換えを迫ることになるにちがいない。また本研究は、文献日本語史研究、琉球諸語研究、本土方言研究を統合し、大きく新しい日琉諸語研究の創出・定着に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：This research was carried out with the main focus on exploring case as a grammatical category in Japanese and Ryukyuan languages. The conclusion is summed up into the following four points. (1) Relations between predicates and arguments are determined by not only case marking but also other means such as word order, animacy effects, world knowledge and context. (2) Word order, animacy effects, world knowledge and context are equivalent to case marking, and they compete one another because a clause can have the only means of determining a relation between a predicate and an argument. (3) Unmarked noun phrases do not necessarily have a slot for case marking. (4) The degree of grammaticalization is different for coding core arguments in Japanese and Ryukyuan languages.

研究分野：日本語学、言語学

キーワード：日琉諸方言 格配列 相互識別 役割標示 ハダカ現象 名詞句階層 デフォルト解釈 文法化

1. 研究開始当初の背景

琉球諸語、本土方言における文法の体系的な記述の進展とその蓄積を背景として、日琉諸語のなかで、さまざまな文法カテゴリーにおける多様性を明らかにするための基盤が整いつつある。この一方で、琉球諸語のみならず、本土方言や古典日本語においても類型論的な多様性に富んでいることがわかってきており、ある種の言語現象の考察では、標準日本語研究が日本語に関して明らかにしてきた事実や前提にとらわれず、広く通言語的・類型論的な視点が不可欠となる。そして格という文法カテゴリーの研究は、まさに通言語的・類型論的な視点を欠くことのできないテーマの一つである。

ところで日琉諸語における格という文法カテゴリーの研究は、述語と項の関係は「格」という文法的手段によって一律に定まるという「暗黙の了解」があるために停滞を招いていると思われる。主語や目的語が無助詞であることを「ゼロ格」「ハダカ格」と称し、目に見えない抽象的な格標示を認める日琉諸語の統語記述は枚挙にいとまがない。しかし広く日琉諸語の格カテゴリーについて考察するとき、述語と項の関係は一律に「格」という文法的手段によって定まるわけではなく、格標示に代替する手段が考えられるとすれば、日琉諸語の言語事実に見合うように上記の「暗黙の了解」は相対的に捉え直す必要がある。

2. 研究の目的

中国語のように主文のテンスの解釈が文脈に依存して定まる言語がある。このことが示唆するように、通言語的にみれば、テンスという文法カテゴリーは文法化の度合いが異なり多様であると考えられる。本研究では、格という文法カテゴリーを考察の対象とするが、格カテゴリーにおいても同様のことが認められることを明らかにする。本研究の目的の一つは、日琉諸語(琉球諸語、本土方言(文献に残るかつての奈良・京都方言を含む)、八丈語)における述語と項の関係(いわゆる格関係)がどのように定まるのかということを検討し、そこに文法的手段だけでなく意味的な手段や語用論的な手段までもが広く認められることを確かめることである。またもう一つの目的は、意味的な手段や語用論的な手段をふまえて格という文法カテゴリーについてのモデルを構築することである。これらの目的に至る過程で、格カテゴリーの文法化の度合いが高い言語、文法化の度合いが低い言語、その度合いがさまざまに中間的である言語というように、日琉諸語における格カテゴリーの文法化の多様性が見出されることになるだろう。

3. 研究の方法

述語と項の関係が定まる際にもっぱら格標示という手段を用い、無助詞現象がまれという言語があれば、それは格カテゴリーの文法化の度合いがきわめて高い言語と言うことができる。日琉諸語のなかで、南琉球宮古語伊良部島方言、池間方言がこうした特徴を持っていることがわかっている(下地 2018、林 2013)。この一方で、かつての奈良・京都方言である古典日本語(竹内 2022)、京都市方言、宮城県登米町方言(竹内・松丸 2022)、中国・四国地方や東北・北関東地方の多くの方言(下地 2022)等では、格標示という手段を用いながらも無助詞現象が目立つ。また、富山市方言(小西 2022)、南琉球八重山語波照間方言(Aso 2015)では、格標示という手段を用いず無助詞であることがノーマルである。

本研究では、格という文法カテゴリーの多様性を見出すために、上述の無助詞現象が目立つ、あるいは、無助詞であることがノーマルである、といった特徴を持つ日琉諸語を主な考察の対象とすることになる。これらの無助詞現象を注意深く観察し、それが、格標示ではない手段(語順、

有生性、世界知識、文脈ほか)が用いられることによるのか、あるいは、記号論的に有形標識と対立していることによるのか、それとも、そのほかの要因によるのかといったことを見定める。そして述語と項の関係を決定する手段同士の関係(競合か分担か)を明らかにしていく。以上が本研究の第一段階である。この段階での調査と分析が進めば第二段階へ移る。この段階では、代表者と分担者が討議しながら、個々の言語における調査と分析の結果を比較考察していくことになる。文法的手段(格標示、語順) 意味的手段(有生性) 語用論的手段(世界知識、文脈)といった整理を前提に、これらのバランスに注意しながら、格という文法カテゴリーについてのモデルを構築し一つの仮説として提出する。

参考文献

木部暢子・竹内史郎・下地理則(編)(2022)『日本語の格表現』くろしお出版/小西いずみ(2022)「富山市方言における格成分のゼロ標示」木部・竹内・下地(編)(2022)に所収/下地理則(2018)『南琉球宮古語伊良部島方言』くろしお出版/下地理則(2022)「日琉諸語の格体系：概観と類型化」木部・竹内・下地(編)(2022)に所収/竹内史郎・松丸真大(2022)「本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について」木部・竹内・下地(編)(2022)に所収/竹内史郎(2022)「上代語の主文終止形節における格配列、相互識別、無助詞現象」木部・竹内・下地(編)(2022)に所収/林由華(2013)『南琉球宮古語池間方言の文法』博士論文、京都大学/Aso, Reiko(2015) Hateruma Yaeyama grammar, In Patric Heinrich, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.), *The Handbook of the Ryukyuan Languages*, Mouton de Gruyter.

4. 研究成果

本研究では、南琉球宮古語伊良部島方言、同池間方言、八丈語、鹿児島県甑島方言、宮崎県椎葉方言、広島市方言、京都市方言、富山市方言、黒部市布施谷方言、宮城県登米町方言、文献に残るかつての奈良・京都方言を調査・観察することによって次の点を論証した。

1. 述語と項の関係を決定する手段には、格標示のほか、語順、有生性、世界知識、文脈がある
2. 一つの節につき一つ的手段があればよいので、語順、有生性、世界知識、文脈はそれぞれ格標示と等価であり、かつ競合する手段である
3. 名詞句は、格という文法カテゴリーをそなえているとは限らない
4. 主要項のコーディングにおいて、格カテゴリーが文法化している度合いが言語ごと、方言ごとに異なる

文法記述を行う研究者の間には、述語と項の関係は「格」という文法的な手段によって一律に定まるという「暗黙の了解」があり、長らく対案のないままこの「暗黙の了解」を前提として研究が行われてきた。しかし、この「暗黙の了解」から距離を置かなければ統語記述が甚だ不十分になってしまう言語があり、そして文法のレベルにおける説明に終始するだけでは不十分な言語があることが明らかとなった。有生性効果、無生性といった項名詞の意味特徴による相互識別の手段や、文脈や世界知識といった語用論的な相互識別の手段を広く包摂し、格という文法カテゴリーにおける文法化のメカニズムを捉えていくような理論が望まれることが確認された。

また、有形格標示の振る舞いについては次のことが明らかとなった。一般言語学的な主格・対格という用語に照らして日琉諸方言におけるガ系の格標示とオ系の格標示を理解する従来の考え方だと、これらの本質的機能はA(他動詞の主語)とP(他動詞の目的語)の相互識別のためにあるという見方が強調されることになり、それらの共通点、すなわち「相互識別機能」が際立

って理解されがちである。しかし、本研究課題では、ガ系の格標示と才系の格標示の情報構造的
非対称性に着目して考察を進め、ガ系はガ系の、才系は才系の独自の情報構造的機能があること
を明らかにした。すなわち「役割標示機能」の観点からガ系格助詞、才系格助詞の振る舞いを理
解することができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 竹内史郎	4. 巻 -
2. 論文標題 格と格助詞	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 よくわかる日本語学	6. 最初と最後の頁 74-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内史郎	4. 巻
2. 論文標題 中古京都方言の主文終止形節における格体系 格配列、相互識別、ハダカ現象、示差的目的語標示	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文法史研究 6	6. 最初と最後の頁 157-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小西いずみ・大槻知世・白岩広行	4. 巻 18-3
2. 論文標題 首都圏方言の二重対格構文 オと無助詞による適格性の違い	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Wang, Danning and Michinori Shimoji	4. 巻
2. 論文標題 The double subject construction restricted to the possessive type: a typological survey	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 In Elia Dal Corso and Soung-U Kim, eds., Language Endangerment and Obsolescence in East Asia, Brill Academic Publishers.	6. 最初と最後の頁 86-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内史郎	4. 巻 -
2. 論文標題 第3章 上代語の主文終止形節における格配列、相互識別、無助詞現象	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格表現』くろしお出版	6. 最初と最後の頁 39-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内史郎・松丸真大	4. 巻 -
2. 論文標題 第4章 本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について 京都市方言と宮城県登米町方言の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格表現』くろしお出版	6. 最初と最後の頁 65-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小西いずみ	4. 巻 -
2. 論文標題 第5章 富山市方言における格成分のゼロ標示 二重対格相当構文が可能になることに着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格表現』くろしお出版	6. 最初と最後の頁 91-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下地理則・松岡葵・宮岡大	4. 巻 -
2. 論文標題 第8章 宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格表現』くろしお出版	6. 最初と最後の頁 157-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下地理則	4. 巻 -
2. 論文標題 第10章 日琉諸語の格体系 概観と類型化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格表現』くろしお出版	6. 最初と最後の頁 205-237
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内史郎	4. 巻 -
2. 論文標題 主語焦点構文における平安時代語と京都市方言との対照研究 古代語の文法にひそむ多様性を見出しているために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野田尚史・小田勝 (編) 『日本語の歴史的対照文法』和泉書院	6. 最初と最後の頁 157-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内史郎	4. 巻 5
2. 論文標題 上代語の従属節、主文連体形節・已然形節における主語標示 ガ、ノ、無助詞における意味的、統語的な制限の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語文法史研究	6. 最初と最後の頁 41-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 竹内史郎
2. 発表標題 文献日本語史で繰り返される統語的な変化を生み出すメカニズム モダリティ接語, 格助詞ガ, 副助詞, 係り結び, ノ準体における
3. 学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター対照日本部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第38 回研究会における講演, (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nakagawa, Natsuko and Hayashi, Yuka
2. 発表標題 Contrastive topic =gyaa in Ikema-Nishihara Miyakoan of Southern Ryukyus
3. 学会等名 Japanese/Korean Linguistics Conference 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林由華
2. 発表標題 概説：琉球諸方言における係り結び研究の展開
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林由華
2. 発表標題 琉球諸方言における係り結びに関連する述語動詞形式の交替現象
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 下地理則
2. 発表標題 有標主格性と情報構造
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小西いずみ
2. 発表標題 富山県朝日町笹川方言の人称代名詞：総合的な形態の主格に着目して
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹内史郎
2. 発表標題 中世末期中央語の主語標示とガの機能の歴史的变化
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 木部 暢子、竹内 史郎、下地 理則（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 310
3. 書名 日本語の格表現	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	松丸 真大 (Matsumaru Michio) (30379218)	滋賀大学・教育学部・教授 (14201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中川 奈津子 (Nakagawa Natsuko) (50757870)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・准教授 (62618)	
研究分担者	小西 いずみ (Konishi Izumi) (60315736)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	下地 理則 (Shimoji Michinori) (80570621)	九州大学・人文科学研究院・教授 (17102)	
研究分担者	林 由華 (Hayashi Yuka) (90744483)	岡山大学・グローバル人材育成院・講師 (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関